

道元禪師の伝説

東 隆 眞

道元禪師の伝説とは、いつごろ、だれによつて、どのような経緯から生れたものかは、あまり詮索されないまま、なんとなく語りしるされてきた、道元禪師をめぐるものがたりというような意味である。

然し、日本仏教各宗の祖師のなかで、道元禪師ほど、伝説の少ないひとは稀れであり、これをまつこうからとりあげた調査、研究といったものは、一、二をのぞいて、まったくなされたことがなかった。

それはなぜか。すでに、これがひとつの大きな問題であるが、それはさておき、それでは、道元禪師の伝説は、まったくのうそというのと、もちろんないわけではない。そこで、わずかなことはあるが、おもに江戸期までに成立した伝記のなかにみられる伝説を概観して、これらの伝説が生れた背景事情などから、気づいた点を、ひとつひとつ報告しておきたい。

宗内の伝記で、現存最古の文献は、瑩山紹瑾の撰述と推定

される『元祖孤雲徹通三大尊行状記』のなかの「越州吉祥山永平開闢道元和尚大禪師行状記」である。この文献には、いわゆる伝説めいたものは、まったくみとめられない。このことは、大いに注意しておかねばならぬこととおもう。

次に、天正十七年に端長が書写した『永平高祖行状建撕記』になると、いささかの伝説が登場してくる。まず入宋中の事件として、大権修利菩薩があらわれ、碧巖集書写を助筆したことである。帰朝後の事件としては、永平寺において、寛元三年四月結夏、その上堂の前後に、天華が道元禪師をはじめいならぶ諸僧の座上や茶盞のなかに散り入るということ、寛元五年正月十五日説戒のとき、正面の障子に五色の光があらわれ、同席の二十人あまりがこれを見したということ、宝治二年四月から十一月十二日まで、僧堂の内外に、すぐれた香りが漂よい亘つたということ、宝治三年正月一日の羅漢供養の日、木像、画像の羅漢が光を放つたこと、建長三年正月五日の夜、花山院宰相入道と靈山院庵室で法談中、遠く鐘

の音が二百声ばかり聞えたということ、以上である。建撕は、大権修利菩薩の碧巖集助筆については、はつきりしたことは判らない、つまり伝説だろうといっているが、永平寺でのさまざまな奇瑞は、道元禪師自身の記録や、ほかにもたしかない史料がのこっているから、たんなる虚構ではないことを強調したいかのうかがわれる。

然し、俄かに、伝説がとりいれられてくるのは、寛文十三年刊、宇治興聖寺の懶禪瞬融が著わした『日域曹洞列祖行業記』のなかの「初祖道元禪師」であろう。即ち、入宋中の事件として、ある夕暮れ、道元禪師の目前に、一頭の虎がうなり声を発して立ち向つてきたので、もつていた拄杖を投げると、この拄杖が忽ち竜と化したので、虎はすぐすごと去つていつたこと、その翌日、一童子がきて、早く日本に帰り、仏法を弘めるように勧めたので、名前をただと、吾は韋將軍なりと答えたこと、碧巖集書写を助けてくれた白衣の老翁は、日本の男女元神、白山明神であるとなつたこと、宝慶三年冬、帰国の船に、一神人が現われ、自分は弟子の竜天であつて、支那では招宝七郎大権修理菩薩と名づけるが、いま道元禪師を守護するといひ、三寸ばかりの白蛇に化けて、その荷物いれにはいり込んだこと、また、暴風雨激しく、船は木の葉のようにゆれるので、観音経を誦むと、忽ち観音菩薩が蓮華のつて海上にうかび、波風おさまつたこと。ところが、

帰朝後の事件としては、寛元二年七月十八日、山神が雲のかたちをなしてあらわれたので、これを吉徴とみて、傘松峯を改め吉祥山と名づけたこと、宝治三年春、羅漢会で、羅漢が光を放ち、松の上に降りたこと、宝治二年、嫉妬深い一婦人が死んで蛇と化したので、これに菩薩戒を授けると、忽ち男子となつて空に昇つていつたこと、にとどまる。

この『日域曹洞列祖行業記』を、さきの天正本『建撕記』と対比すると、前書が後書を受け継いでいるのは、一夜碧巖と、羅漢放光の二点であるが、これさえも若干の変化がみられ、とくに、前書には、入宋中の伝説が、大幅に増加していることがめだつている。

それはなぜか。明和八年、京都柳枝軒刊、『宝慶記』の冒頭に、「承陽祖彈虎像」と題して、空中におどる一頭の竜に坐した道元禪師と、その膝もとに、拄杖をかむ一頭の虎のさし絵が描かれており、この裏に、「祖像因縁」と題する面山瑞方の解説がある。この解説の一節によれば、この弾虎^{トラヘネ}の拄杖のはなしは、道元禪師の弟子のひとり寒巖義尹が入宋してみると、かの地のいたるところで、このことを図にしてあがめているのを見たので、これを写して日本に帰り、その一軸が江州の青竜寺にあつたので、いま自分はみずから再写して、ここに掲げたという。ときに寛延三年の夏である。

寒巖義尹といへば、『日域曹洞列祖行業記』の撰者・懶禪

道元禪師の伝説（東）

は、実は寒巖派の本拠地、肥後大慈寺の大焉広椿の法嗣、万安英種の弟子であつて、したがつて、かれ自身また寒巖派に属している。さらに、この『日域曹洞列祖行業記』そのものが、道元、懷辨、徹通、寒巖と、即ち大慈寺所伝の法脈に基いた、寒巖と、即ち大慈寺所伝の法脈に基いた、寒巖派中心の僧伝である。いま、これらのことから推測すると、『日域曹洞列祖行業記』に出ている入宋中の伝説は、おそらく、この寒巖ないし寒巖派から発生したものがたりを集大成したと考えてよいのではなからうか。

ここで気づくことは、さきの天正本『建誓記』が、「虎炊ノ柱杖」は、かつて道元禪師が、越前波着寺に置かれたことがあつたが、いまは盗まれて無いと録していることである。もし、これによれば、かの地で、道元禪師が、邪魔な虎を柱杖で追つばらつたことは、事実であつたのかもしれない。その柱杖が竜に化けたのは、すなわち虚飾の伝説というものである。永正十四年、祐稟のかいた『紀州由良
霧峰開山法燈円明国師之縁起』の「伏虎禪師」のことを想起すると、この母胎となるなんらかの事実があつたとおもわざるをえない。

それでは、どうして、些細な事実に、尾緒がついて、大袈裟な伝説になつたものであらうか。それはいろいろ解釈がなりたつが、その一例として、いわゆる一夜碧巖のことを考えてみたい。

碧巖集の助筆者、大権修理菩薩が、日域男女元神、白山明神となつたとあるが、大権修理菩薩はのちに仏法の守護神とされ、白山明神は、これは土地の守護神である。とくに、白山明神は、加賀の白山をさし、越前、能登いつたいの北陸地方の土俗信仰の中心であるのみならず、富士山、立山とならぶ祖霊の霊山である。永平寺や大乘寺を拠点とする初期道元門下にとつても、やはり白山は、素朴な原始的な意味で自分たちの守護神であり、土地の人達に教化を布く場合にも、白山信仰に対する感情を無視できなかったとおもわれる。永平寺や大乘寺の「白山水」、瑩山紹瑾の『總持寺中興縁起』の鎮守三所権現としての「白山」、瑩山情規の「白山八幡監齊使者」、「仏法大統領白山妙理権現」、陸奥黒石正法寺開山・無底良韶の新寺造営祈願文の「白山妙理大権現」、越前大野宝慶寺開山・寂円のたてた「白山神社」、宝慶寺塔頭の白藏庵はすなわち「白山権現」の別当であること、安芸洞雲寺につたわる道元禪師にまつわる「白山石」の伝説などは、このことを示す証明のひとつであらう。これらを、たんに神仏習俗思想のあらわれとみるのは、あまりにも浅薄にすぎよう。白山明神のくみあわせに、北陸土着民の息吹きが、なまなましく感じられるからである。

さて、このように『日域曹洞列祖行業記』は、それ以降に成立した各種の道元伝記にみられる伝説の源頭に立つ位置を

占めるのである。それと同時に、この書は、その十六年後、すなわち元禄二年、宗外のひと、結城孫三郎らによつて写された、説経本の『越前国永平寺開山記』の成立に、大きな影響を与えたものと考えられる。いま必要な箇所を摘り出すと、入宋の舟案内人は、白山権現であり、天竜山案内の老人は達磨大師であつて、この化身が碧巖書を渡し、早く帰国を勧め、天竜山からの帰路、この達磨の化身から与えられた柱杖が大蛇となつて、虎の難から守る。帰国の海路、風雨にみまわれ、竜女があらわれて、道元禪師の血脈を乞う。竜女は返礼として、行動をともしにしている木下道正に妙薬を与え、その製法を教える。即ち「神仙解毒万病円」である。ここで、道元禪師と道正が観音経をよむと、観音があらわれる。やがて、日本へ帰り、この二人は宇治に光照寺をたて、大いに「神仙解毒万病円」をひろめる。また、大原の奥に、貧しい母娘がいる。道正は、病母に考行するこの娘に、解毒丸を授け、道元禪師は戒経を与え、娘はお礼に、お守りを道元禪師に渡す。このお守りは系図で、娘は禪師の妹であることが判り、やがて母娘は出家する。また、鎌倉の辻堂で、道元禪師が宿をとつていると、その夜、そばの井戸から女の霊が出たので、これに戒経を授けた。これを鎌倉のほし井戸という。また、鎌倉からの帰路、越前のいのふ峠で、第六天の魔王の眷族、七せん夜叉のあにらじんまにらじんが現われたの

で、道元禪師は大般若の咒文を唱えて杖で打つと、この鬼神は悟りをえた。この杖の傍らにこの咒文をかくのが、疱瘡のまじないとなり、まこじやくしと言つている。やがて、永平寺を開き、その父と義弟のかな若丸の為に法華経を誦むと、その功德で成仏の姿をあらわした。

こうして、道元禪師伝が、たくみに終始一貫して伝説化されているのであるが、これは『日域曹洞列祖行業記』と『道正庵元祖伝』とを参考にして脚色したものであることは、ほとんどまちがいないとおもわれる。『道正庵元祖伝』は、寛永十六年の刊行で、その趣旨は、木下道正が道元禪師について入宋し、広野で、禪師が病氣になつたとき、稻荷神があらわれて、妙薬を与え、その製法を教え、これを道正が伝えたというものである。

これは、宗外では、江戸時代に、宗門と因縁あさからざる道正庵によつて、解毒丸の宣伝をかねて、道元禪師の遺徳を宣揚すべく、まつたく伝説的な道元伝をつくりあげたものであろう。そうして、これら伝説的な『越前国永平寺開山記』などが、その後、宗内でかかれた各種の道元伝に、ほとんど無批判に採用されることとなる。これは、執筆した宗内学者が、あえて無批判に集録したものであろう。これは、おそらく、民間伝説のあまりにも少ない道元禪師の生涯に、その史実の有無はともかくとして、できるだけの庶民性というか大

衆性といおうか、現世利益的な功德を付加しようという、多分に意図的な操作が働いていたものではなからうか。

以上は、宗内で成立した道元伝記をめぐる伝説とその成立事情とを中心にふりかえつてみたのであるが、次に、宗内とは全く無関係におこなわれている宗外の伝説について、つけたしておきたい。

昭和四十四年に刊行された安川浄生氏の『道元禪師入宋帰朝地点の研究』には、道元禪師に関する九州地方の民間伝説が、沢山のせてある。それは、これまで宗内や中央には紹介されなかつたものばかりである。北九州市地方にある道元という地名、道元禪師を拜むための墓、久我家の笹ささ竜胆りゅうたんを家紋として久我性をなめる人々の現存すること、道元禪師が、悪蛇から娘を救つたはなし、悪病退散のためにたてた地藏堂あと、自作の木魚なども伝わっている。とくに興味をひくのは、鹿児島県坊の津港は、明全と道元禪師が、入宋のため、この地の榮松山興禪寺に滞留して便船をまつうち、明全は病氣、遷化、その遺骸を葬つた禪師は、ひとりここから入宋したといい、明全の墓が現存している。この伝説について、安川氏は、坊の津は、道元禪師が宋から帰朝して上陸した地点ではないかと推定している。

これらの伝説のこまかい検討はさておき、こうした道元伝説が伝えられていることそれ自体が、非常に重要なことであ

つて、道元禪師は、ある一定の期間にわたつて、九州に滞在していたことを暗示しているのではないかとおもう。それと、水野弥穂子氏によれば、正法眼藏『辨道話』に、「紹定のはじめ、本郷にかへりし」とあるが、禪師が九州に着いたのは、紹定元年の前年、すなわち宝慶三年、日本の安貞元年秋であり、本郷とは本国つまり日本のことではなく、生れ故郷の京都を指すとみられるという（『正法眼藏辨道話、正法眼藏隨聞記他』、古典日本文学全集）。

いま水野氏の意見にしたがうと、安貞元年秋、九州に上陸して直ちに京都建仁寺へ入つたのではなく、半年間くらいは鎮西、太宰府あたりに滞在していたということになる。いずれにせよ、いまこれ考えあわせると、一見突飛な伝説も、道元禪師の伝記ないし史実を再吟味して、より正確なものに書き改めなければならぬ鍵を秘めているのではなからうか。そういう一例である。

これも最近のことであるが、昭和四十三年刊、村岡潔氏の『吉田松陰と僧黙霖』をよんでみると、月性は、その幼少時代「妙円寺の鼻つたれ道元坊」とよばれていた。「道元は鎌倉時代初期の偉い僧で、越前の永平寺を総本山とした人だが、どうしたわけかよく憎まれ口の替え玉につかわれた」とある。腕白小僧のことをなぜ道元坊とよぶのか、村岡氏に照会したところ、山口県地方及び滋賀県の一部で、いたずらの

ひどい子を、「このどーげんめッ」とか「どーげん坊すめッ」といならしていることと、小説手法的な修辭上の点から、「どーげん坊す」の語意を強めるため、道元禪師をひきあいに出したもので、決して伝承文献によつたものではないとの返信に接した。しかし、これなどは、さしずめ、現代もなお新しくつくられつつある、道元禪師の伝説といつてよいのではあるまいか。

付記

発表のあと、新潟県双壁寺住職坂内竜雄老師から、新潟県北魚沼郡小出町の曹洞宗寺院、西福寺に、江戸から流れついた仏師、酒井雲蝶が彫刻した、いわゆる「虎退治の道元禪師像」が開山堂に安置されたと知らされた。文政末期の作で、極彩色の立派なものだという。

また、駒沢大学講師峯岸孝哉氏から、大分県の豊後竹田のちかくに「道元越え」とよばれるところがあり、同地では、帰国した道元禪師は、肥後河尻からここをとおつて別府灣へ、さらに瀬戸内海をわたつて京都へ着いたと伝えられるはなしもあると教えられた。なお、この豊後竹田あたりには、道元禪師の筆蹟の断簡が散在している。

以上、とりあえず両氏の御教示をご紹介するとともに、あらためて深い感謝のこころをささげるものである。

執筆者紹介(四)

- | | |
|------|----------------|
| 渡部孝順 | (寺院住職) |
| 笠井貞 | (群馬大学教授) |
| 東隆真 | (駒沢女子短期大学講師) |
| 岩佐貫三 | (東洋大学東洋学研究所) |
| 金子寛哉 | (大正大学大学院) |
| 平野宗浄 | (花園大学助教授) |
| 長嶋孝行 | (国会図書館副主査) |
| 江隈薫 | (函館大谷女子短期大学講師) |
| 内藤竜雄 | (松本美須高校教諭) |
| 池田魯参 | (駒沢大学助手) |
| 田中敬信 | (駒沢大学大学院) |
| 服部克彦 | (鉄鋼短期大学教授) |
| 吉津宜英 | (駒沢大学助手) |
| 高橋壮 | (東京大学大学院) |
| 小川一乘 | (大谷大学助手) |
| 木村俊彦 | (東北大学研究員) |
| 舟橋尚哉 | (大谷大学助手) |
| 山本啓量 | (石川県農業短期大学教授) |
| 吉元信行 | (大谷大学研究員) |
| 有賀要延 | (身延山専門学校卒) |

(三四一頁へつづく)